

アボリジニの言語

河崎 靖

序

オーストラリア先住民の世界では、どこでも、適切な土地の言語を話すことがパスポートであり、土地の人や精霊に、自分が親しい知己でありそこにいる権利があることを示すのである。¹

世界の言語の多くはおそろべき速度で減びつつある。例えばオーストラリア先住民の諸言語は 250 にも及ぶが、その大部分は既に消滅し、今後とも長く存続しそうなものはほとんどない²。同じような状況は世界に現存する他の言語についても当てはまる³。ロマンス語学者プライス Price, Glanville が著書 “The Languages of Britain” (1984:170) で述べたように、今日、英語は ‘killer language’ 「殺し屋の言語」としての機能を図らずも果たしている⁴。その一方で、英語は奇しくも、文化と言語の均一化を助長する世界化の力を示し、その英語の普及がまさに少数言語の抵抗の道具ともなっている⁵。

ただ、実際どんなに謝られても（それが後付け的であればあるほど）、取り返しのつかないほど危機的な状況にある言語がある。オーストラリア政府の方針（2008 年 2 月）はラッド首相の口を通して確かに次のように語られた：「誇りある人々と文化が受けた侮辱を申し訳なく思う」、と⁶。過去の政権が先住民に対して行なった政策に対して、このように首相が表明した謝罪文書がたとえ

議会下院において全員一致で採択されたとは言っても、だからといってアボリジニを巡る環境が劇的に改善されたというわけでは決してない⁷。

約 250 年前にヨーロッパ人が突然やってきて急激な近代文明化を図ろうとした時、ミショナリーの果たした役割はすこぶる大きい。言語について言えば、文字がもたらされたことが大きい、これにも増して彼らミショナリーの影響は（意識的であれ無意識的であれ）甚大なものだったのである。宗教的目的のため、宗派・活動領域の差異はあれ、彼らは現地の言語に関心をもち、例えば聖書の翻訳、現地語の文法・語彙の記述のみならず、その体系化・文字化を進めた。こうしたケースでは、植民地化と言語政策、殊に植民地行政とミショナリーの果たした役割を歴史的に十分、踏まえなければならない。植民地化の歴史を言語政策という観点から捉え直すことの必要性である⁸。アボリジニ側から見れば、彼らアボリジニは常に戸惑いを示し、ヨーロッパ人にずっとさまざまな警鐘を鳴らし続けてきたわけである⁹。

一方、人類の文化遺産としての言語を保存しようとする動きも必然である。人類の歴史を通して言語の死は繰り返されてきたのは事実である。Evans (2010:xviii) の言うよう Every two weeks, somewhere in the world, the last speaker of a fading language dies. 「世界のどこかで 2 週間に 1 人のペースで、衰退しつつある言語の最後の話者が死んでいる」。世界に現存する諸言語が消滅する速度は確実に増している。近いうちに今ある言語のおよそ半数が消滅すると言われているほどである¹⁰。

1. アボリジニの文化——先行する言語文化を踏まえて——

The great creative forces that inspire all humanity do not emerge out of universal civilization but out of the individuality of

separate ethnic collectivities – most particularly, out of their very own authentic languages. (Fishman 1982:6)

「人類を鼓舞するような偉大な想像力は、普遍的文明からではなく、独立して存在する民族的集合体という個性の中から生じる——特に、それぞれの集合体に属する真正の言語から」¹¹

「アボリジニ」という用語は、もともとラテン語の「最初から」(aborigine)を意味する ab「～から」+ origine「起源」に由来している。本来は、古代ローマ人から見た中部イタリア先住民を指示していたのだが、英語(aborigines)では意味がより一般化し「原住民一般あるいは土着の動植物」などを指し示すようになった。オーストラリア大陸が地形的に現在のようになって以後、ヨーロッパ人が到来するまで、オーストラリアは外の世界から、言わば隔絶された場所であった¹²。アボリジニが残した壁画にはインドネシア方面の特徴を有する帆船が描かれており、オーストロネシア系の文化¹³と交流があったことが示唆されている¹⁴。

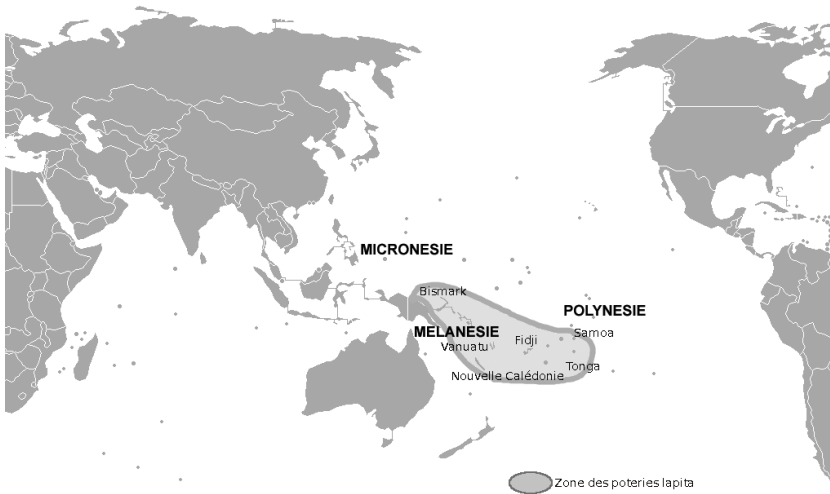
そもそも、原初の先住民(アボリジニの祖先)がどこから来たのか、この点を確定することは学術的に難しい¹⁵。純粹に言語の問題に限定して、これまで印欧語学で営々と培われてきた比較言語学の手法を用いるにしても、時間のスパンが違いすぎ、そもそも、この印欧語の方法論が適用可能なのか疑問を呈さざるを得ない。すなわち、印欧語族に属する諸言語はせいぜい数千年の歴史しかないのに対し¹⁶、ずっと長い歴史(万単位の年月)が想定されるオーストラリア原住民の言語に比較言語学のアプローチがどこまで有効なのかは定かではない¹⁷。言語を超え広く民族移動という観点から見れば、オーストラリアの原住民のルーツは、約5万年前の更新世末期に陸続きだったニューギニアを通り、

アジア大陸から移動した人々ということになろう¹⁸。海面の上昇により、オーストラリアおよびニューギニアが分離した後も、人々の移動¹⁹は続き、現在のパプア人（ニューギニアのパプア諸語を話す人たち）が形成されるのである。こうして、オーストラリア（アボリジニ）とニューギニア（パプア人）の人々がオセアニアの最も古い先住民とみなされることになる²⁰。ただし、オーストラリア諸語とパプア諸語との系統関係はもはや明らかではない²¹。

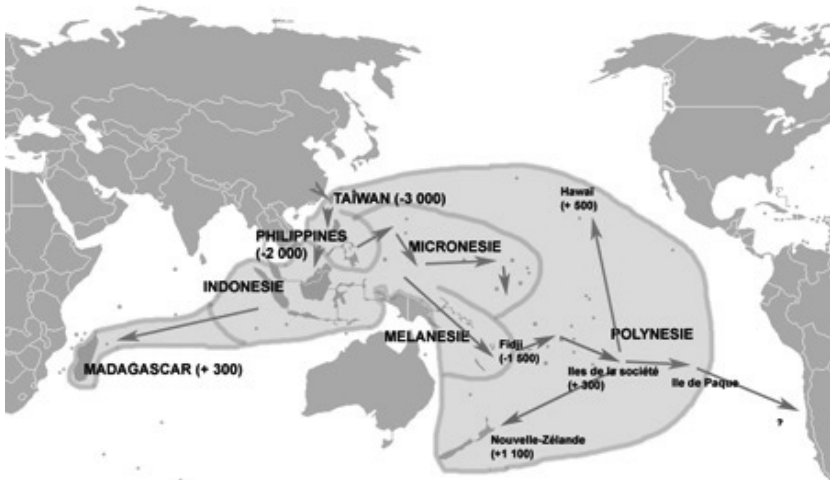
オセアニアの言語状況について言えば、オセアニア島嶼部の大部分（特にミクロネシア・ポリネシア²²）、および、東南アジア島嶼部の圧倒的大部分は、オーストロネシア語族²³に属している²⁴。この歴史的背景を探るには²⁵、東南アジアからオーストラリアに人が入植した今から5万年前の出来事の、その次の段階を知らなければならない。すなわち、紀元前1500年頃、西北メラネシアから、ラピタ文化²⁶（ラピタ人：原オセアニア語を話す原オセアニア人のこと）で有名な海洋的な語族が東の方向へと大移動を始めたのである²⁷。オーストロネシア語²⁸のもともとの原郷は中国南部が想定され²⁹、オセアニアへは東南アジア島嶼部（フィリピン・インドネシア）から入ったのであろう。こうして、東南アジアからオセアニアにかけて³⁰、オーストロネシア語族の大きな連続的な分布地域が生まれることになった³¹。

オーストロネシア語族は、実に東はイースター島から西はアフリカ大陸の東のマダガスカルに至るまでの広大な領域という、印欧語族に次ぐ2番目の大きさである。人類は東南アジアからオセアニアに何回も波となって渡り広がっていったという経緯があり、オセアニアは東南アジアの延長という側面も確かにある。自然人類学的には、東南アジアの人も、ミクロネシア・ポリネシア³²の人たちもモンゴロイドであることは一般に認められているが、さらにメラネシア³³・ニューギニア・アボリジニの住人もモンゴロイドの中に入るという説も提唱されている³⁴。

アボリジニの言語



古い時代（4000 年近く前）にラピタ人が広がったと考えられる範囲



オーストロネシア語族の大移動³⁵

さて、アボリジニの文化的背景³⁶に入っていこう³⁷。アボリジニの世界観（霊性・神話体系・法概念）を最も集約した形で表現した概念は大地（カントリー）であり、これは一般には「ドリーミング」dreaming と呼ばれている³⁸。大地は、あらゆる生命の起源とうみなされている。例えば日本神話だと、神話で語られている物語は以前に起こった何かしらの事実を反映していると捉えられることが多いけれども、このドリーミングというのは大昔に起こったのではあるが過去に終えられたことではなく現在もなお続いて起こっている考え方である。まず初めに大地があり、そこにドリーミングたち（祖先神）が立ち現われ、地形をかたちづくり、各種の存在者を創造したのである³⁹。すべては大地からやってくるとされ、あらゆる存在が大地によって生み出され、大地によって維持されていると考えられる⁴⁰。保荊（2004:63）によれば、この「大地（カントリー）」は、「ドリーミング」・「法」・「正しい道」・「歴史」と相互に交換可能な用語であるという。さらに言えば「正しい道、あるいは倫理という語に、物質的か形而上的かの分離がなされていない点は決定的に重要である。[…] 大地・ドリーミング・法という三つの概念が相互に交換可能なのは、これらすべてに正しい道という倫理性が溶け込んでいるからにほかならない⁴¹」。このようにドリーミングは、特定の時間に縛られない、いつもある存在である。現在を生活している人々にも直接的に影響を与えるものなのである。

大地（カントリー）は、その土地から採れる動植物を人間に提供してくれる場所という単なる空間としての意味だけでない。大地は精神的な拠りどころでもあるのである。ブッシュや岩場も先祖の魂の宿る場所であり、また各部族ごとの聖地があり、そこでは定期的に儀式が行われる⁴²。聖地は、創造のエネルギーが宿っている場所であり、アボリジニが創造の時代に立ち戻り、生命の原点に触れる場でもある⁴³。こうした宗教文化的な背景は、イギリス人をはじめとするヨーロッパ人には理解されず、キリスト教の布教の過程で文化が破壊さ

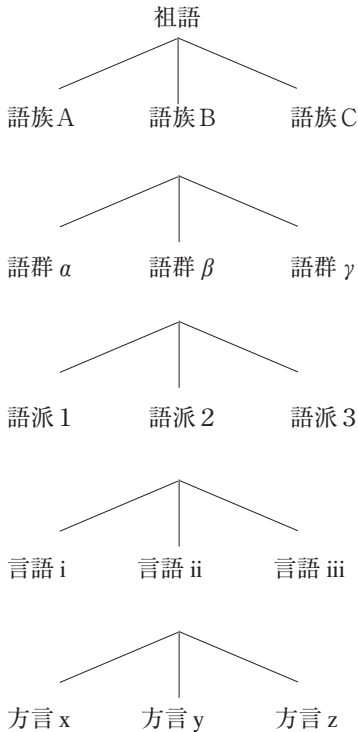
れていった。自らはドリーミング（祖先神）の法倫理に従い生きる、大地の民族アボリジニ（自称グンビン）は、自分たちとは異質のイギリス人をどう捉えていたのであろうか⁴⁴。アボリジニ自身は大地の法に護られているのに対し、不道德な行為（例：生物を殺す）を繰り返す人たち（例：イギリス人）には別の出自・由来があると考えていたのであろう（白人〈別名カリヤ〉が「猿から生まれた」とする物語があるのは、どうやら進化論⁴⁵の基本的な考え方よつてのことのようである⁴⁶）。いずれにしても、アイデンティティーの喪失にもつながりかねない痛手を受けた先住民族のアボリジニの文化には、私たちがイメージするようないわゆる宗教というものはなく、特定の教祖もいなければ、教会のような建物もない。キリスト教のような唯一絶対の神という存在はなく、人間は自然界のあらゆる種（動植物）と同じ生命を分け合っているという見方をする⁴⁷。その土地に生きる自然界の存在すべてと同等に人間が生活する場である。祖霊という一つの魂から生まれたあらゆる生命は互いに等しい存在であり、人間だけが抜きん出ているのではないという世界観である。

2. 言語の系統関係

エヴァンズ Evans (2013:23) によれば「自分のクラン（部族）の言語は土地権利証書のようなものであり、土地の所有権に加えて、精神的安寧と、そこで狩りをする時の幸運を確かなものとする。一方、他の言語の知識は、外に広がるネットワークを自分のものとすることを可能にする⁴⁸」。ここで述べられているように、自らのアイデンティティーを示す機能を果たす言語は、同時に、地理的・社会的な意味で孤立して存在しているわけではないのである。オーストラリアの言語分布地図を一瞥すると、ほんのわずかの話者しかもたない、かなり多くの言語がオーストラリアの地図の隅々にまで境界線を張り巡らしている

さまに驚きを覚えるが、実際には1つのクラン・1つの家族の中で多様な言語が日常的に用いられているのである⁴⁹。

そもそも、言語と言語の関係を示す語族・語派という基準の設定は一般的にそう容易な作業ではない⁵⁰。語族・語派を認定する基準の一提案として⁵¹、基礎語彙の音韻対応をもとに提唱されたアプローチが語彙統計学 (lexicostatistics) 的手法である⁵²。



基礎語彙が2言語間で共通に保持されている割合を算定し、言語間の親疎を図る方法が語彙統計学である。諸言語間で算出された保持率に基づき、系統的下位区分を行う⁵³。この作業は、言語のレベルに限らず、語族・語派・方言にも適用される。

ただし、地域ごとに経験的な調整が加えられるのが通例である。例えば、次のような分類基準である：方言（100～a%）、言語（b～c%）、語派（d～e%）、語群（f～g%）、語族（h～i%）。確かに、どの語族、どの語派などにも適用できるような普遍的な数値が確定されることが望ましいが、実際の現場（フィールド）ごとに事情が異なり、統一した数値が用いられないのが現状である。ちなみに一例として、アボリジニ言語の間で（例：ティウイ語・ピチャンチャチャラ語・アリャワラ語）で、下に挙げる常用語彙（50語）を用いて、語彙の共通性を測ってみると以下のようなになる。50の語彙のうち、どのくらいの頻度で共通なものが見られるかという調査である⁵⁴。

ティウイ語とピチャンチャチャラ語の間 12%

アリャワラ語とティウイ語の間 8%

ピチャンチャチャラ語とアリャワラ語の間 16%

	ティウイ語 (Tiwi)	ピチャンチャチャラ語 (Pitjantjatjara)	アリャワラ語 (Alyawarra)
男	awurrini	wati	artwa
女	yimparlina	minyma	arila
父	ringani	mama	akapurta
母	naringa	nguntyu	akngiya
頭	pungintaga	kata	akapurta
目	pitara	kuru	artnga
鼻	yarrangantamura	mulya	ala

アボリジニの言語

耳	mikantanga	pina	iyipa
口	yarrapuntara	tyaa	arrakirta
舌	yimitarla	tyarliny	alinya
歯	yingkana	kartirti	arntika
手	yikara	mara	itipa
胸	pularti	ipi, mimi	aylpatya
腹	pitapita	tyuni	atnirta
尿	pwatini	kumpu	umpwa
糞便	kinirri	kuna	atna
腿	karipayua	tyunta	ilyipirra
足	kintanga	tyina	ingka
骨	pwata	tarka	ngkurna
血	yimpulini	yirrami	arrknga
犬	palangamwani	papa	aringka
ヘビ	aruwuni	nyinngi	unima
カンガルー (ワラビー)	tarraka	marlu	aghirra
ボッサム	nguninga	wayurta	antina
魚	miputi	antipina	irrpinga
クモ	parraka	impu	impa
蚊	mimini	kiwinyi	aghinya
エミュー	—	tyakipirri	arranga
オオイヌワシ	kutulakini	warlawurru	irritya
カラス	wakwakini	kaamka	angirla
太陽	yiminga	tyirntu	ingkinya
月	taparra	kityirli	alkinta
星	tapalinga	pimtirri	ayntyarra
石	waranga	yapu	apurta
水	kukuni	kapi	kwatya
キャンプ	tangarima	ngurra	apmira
火	yikwani	waru	ura
煙	kumurripini	puyu	ukurta
食べ物	yingkiti	mirka	amirna
肉	puningkapa	kuka	akira

立つ	inti	ngarra-	itnima
座る	mu	nyina-	anima
見る	emani	nya-	arima
行く	uri	pitya-	alima
手に入れる	marri	mantyi-	inima
打つ（殺す）	pirni	pu-	atuma
私	ngia	ngayulu	ayinga
あなた	nginta	nyuntulu	nga
1	yati	kutyu	anyinta
2	yurrara	kutyarra	atirra

3. アボリジニの言語

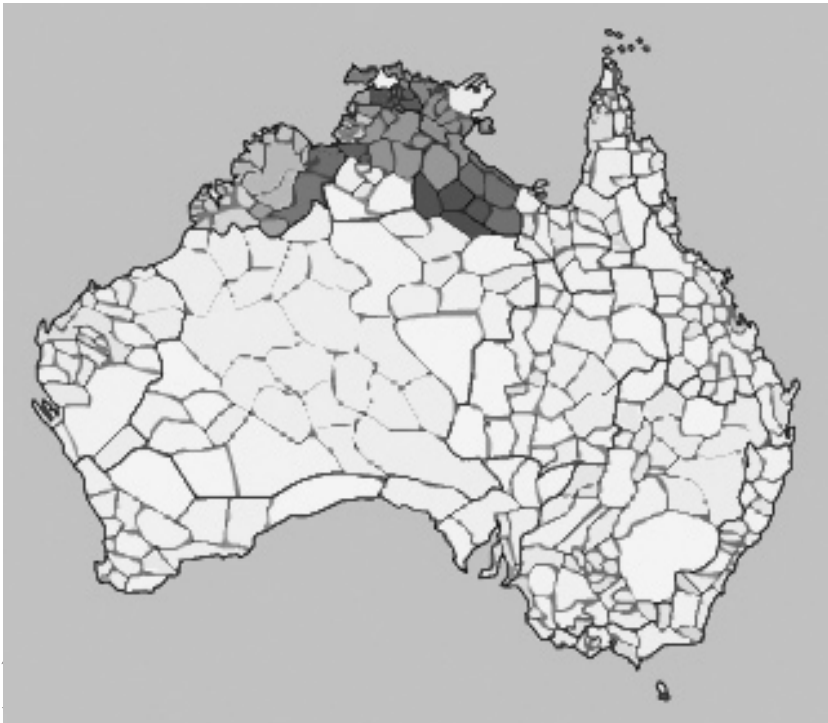
The deep creative interactions and synthetic insights come up, when we look at one language or culture through the prism of another. (Evans 2010:19)

「私たちが1つの言語のプリズムを通して他の言語ないし文化を見る時、深いレベルでの創造的な交流と統合的な洞察力が生まれる」

一括りに「アボリジニ」と言っても⁵⁶、実際は多数の部族から成り立っている。言語調査からすると、多く見積もると26~28ほどの下位グループに分類され、それらのグループはエアーズロック近辺のアナング（Anangu）族、キュランダ地域（ケアンズの近く）のジャプカイ（Tjapukai）族のように区分されるわけである。そして、それら相互間の文化的相異も比較的大きいとされている⁵⁷。18世紀末、ヨーロッパ人がオーストラリアを発見した時点で、30万人

から 100 万人ほどのアボリジニがオーストラリアで生活していた⁵⁸。個別言語の数は 150 ～ 650、部族数では 700 を越えていたと言われている⁵⁹。

アボリジニの諸言語は概して多様性に富むと言えるが、それでも、次の地図で見るところの、オーストラリア西部、および、北部のキンバリー・アーネムランドを除く全域が、パマ・ニュンガン（Pama-Nyungan）語群⁶⁰に占められていることがわかる。いわば過半数の言語がこの語群（パマ・ニュンガン⁶¹）に含まれることになる⁶²。



リア大陸の中でも、西オーストラリア州の最北部、および、北部準州（Northern Territory）にある約 70 の、接頭辞を頻繁に使う諸言語（非パマ・ニュンガン語群）が分布している⁶³。これら言わば「接頭辞言語」同士もまたお互いに異なっており⁶⁴、23 の語群に分けられるのが通常である⁶⁵。

これまでの先行研究で、パマ・ニュンガン系も非パマ・ニュンガン系も併せて、オーストラリア原住民のほぼすべての言語は系統的に 1 つの系統に由来する（音韻・文法・語彙の面でかなりの共通点や類似点があるので 1 つの語族であったとする見解⁶⁶）と言われているが（例えば以下の引用に見られるように⁶⁷）、

Most linguists now believe that all the languages of mainland Australia are related to each other. Just as the Indo-European languages, [...] are held to constitute a single large family, so also certain general similarities among Australian languages suggest an 'Australian language family'. (Yallop 1982:30)

この点に関し決定的なことはなかなか言い難い。いわゆる印欧語学で培われた歴史・比較言語学のアプローチ（比較法）がどのくらいオーストラリア原住民の諸言語に適用可能なか慎重にならざるを得ない。語族・語群の定義自体を見直し当てはめるという作業も必要になってこようと思われる。慎重な論調で語れば、Blust（2013:761）の言う通り、

In 1841 the English sea captain George Grey drew attention to widespread similarities in phonology, lexicon and pronoun systems among languages across the entire southern half of Australia (Dixon 1980:11). This is sometimes taken as the first recognition of an Australian language family, although most contemporary

Australianists probably would object that the languages Grey compared belong to a single subgroup (Pama-Nyungan) which covers about seven-eighths of the Australian landmass.

現状では、パマ・ニュンガン語群とみなされる言語のグループを1つの「語族」と捉えるのが妥当な解釈といったところであろう。

さて、オーストラリアの諸言語のうち、パマ・ニュンガン語群に属さない諸語派を地域別にリストアップすると以下ようになる。

〈アーネムランド（大陸北部）〉

1. ティウイ (Tiwian) 語派：ティウイ語 (Tiwi) など
2. イワイジャ (Yiwaidjan) 語派：ガリグ語 (Garig)・マルグ語 (Margu)・
イワイジャ語 (Yiwaidja)・マウン語
(Mawng)・アムラグ語 (Amurag) など
3. ガグジュ (Gagudju) 語派：ガグジュ語 (Gagudju) など
4. ナカラ (Nakkaran) 語派：ナカラ語 (Nakkara) など
5. グンウイング (Ganwinyguan) 語派：グンウイング語 (Ganwinygu)・ワ
ラン語 (Warlang)・ンガンディ語
(Ngandi) など
6. ブララ (Burarran) 語派：ブララ語 (Burarra) など
7. ヌングブユ (Nunggubuyan) 語派：ヌングブユ語 (Nunggubuyu) など
8. エニンディリヤグワ (Enindhilyagwan) 語派：エニンディリヤグワ語 (En-
indhilyagwa) など
9. マラ (Maran) 語派：マラ語 (Mara)・アラワ語 (Alawa) など

10. マンガライ (Mangarayan) 語派: マンガライ語 (Mangarayi) など
11. ヤニュワ (Yanyuwan) 語派: ヤニュワ語 (Yanyuwa) など
12. マンゲル (Mangerrian) 語派: マンゲル語 (Mangerr)・ウニンガング語 (Urningangg) など
13. ガラワ (Garawan) 語派: ガラワ語 (Garawa)・ワーニ語 (Waanyi) など

〈北部準州 (Northern Territory)〉

14. ミンギ (Minginán) 語派: ミンギン語 (Mingin) など
15. ララギヤ (Laragiyan) 語派: ララギヤ語 (Laragiya)・ウルナ語 (Wulna) など
16. グンガラガン (Gungaraganyan) 語派: グンガラガン語 (Gungaragany) など
17. ワライ (Warayan) 語派: ワライ語 (Waray) など
18. デイリー (Daly) 語派: ワジギン語 (Wadjiginy)・ジェライジ語 (Dyeraidy)・ンゲンキクルンゲル語 (Ngenkikurrungur) など
19. ジャミンジュング (Djamindjungan) 語派: ジャミンジュング語 (Djamindjung) など

〈キンバリー (大陸北部)〉

20. ジェラガン (Djeragan) 語派: ガジェラワング語 (Gadjerawang)・グルワリン語 (Guluwarin) など
21. ブヌバ (Bunuban) 語派: ブヌバ語 (Bunuba) など
22. ウォロラ (Worrوران) 語派: ウォロラ語 (Worrorra) など
23. ニュルニュル語派 (Nyulnyulan): ニュルニュル語 (Nyulnyul) など

さて、ここまで観察した諸言語以外は、すべてパマ・ニュンガン語群⁶⁸に属し、他の語群に比べて格段に広範な広がりを見せている。この語群に属する言語の総数は約 175 である。このパマ・ニュンガン語群（接尾辞言語）はお互いに比較的、似ているが、それでもいくつかの下位分類（すなわち語派）に分けられる。

パマ・ニュンガン語群の下位区分

〈南西語派〉 South-Western (Yallop 1982) 大陸の南西部

ピチャンチャチャラ語 (Pitjantjatjara) ・ ジャル語 (Djaru) ・ グリンジ語 (Gurindji) ・ ワンジラ語 (Wanyjirra) など

〈アランダ語派〉 Arandic (Yallop 1982)

アランダ語 (Aranda) など

〈バークリー台地・西クィーンズランド語派〉 Barkly Tableland and Western Queensland

アリャワラ語 (Alyawarra) など

〈南東語派〉 South-Eastern Australia

ディヤリ語 (Dieri) など

〈パマ・マリック語派〉 Pama-Maric (Yallop 1982)

ウィク・ムンカン語 (Wik-Munkan) など

〈トレス島嶼語派〉 Torres Strait Islands (Yallop 1982)

ミリアム語 (Miriam) など

〈その他のクィーンズランド州 (Queensland) の諸言語〉

ジルバル語 (Dyirbal) など

	ティウイ語 (北部準州)	マウン語 (北部準州)	アニンディリヤ グワ語 (北部準 州)	ニュンガル語 (西豪州南西部)
犬	pilangimwani kirarringani wangkini pamulampunhi	lulutj	waruwarta	ruwurt
落ちる	-akupuranthi -awulighi	-ngulk- puni	-ingkilharrina -ilyikatjawuna	tapalar-
食べ物 (野菜)	yingkiti muwunikini	warlitj	anhinga	marany
足	milampwara kintanga	yurnu	alhika	tijn mart
与える	-akirai -ilua	-u	-kwuna	yang-
行く	-uri -mi -atuala	-a -nya -tja	-ilhikena	kurl-
地面	yarti yakaluwini	kunak	atjiringka	putjurr-
頭	pungintagha tuulua	wantji	aringka	kat
ヘビ	taringa aruwunga	arukin	yapitjapirra	nurn
水	kukuni	wupatj	ayuwura akwunga	kep papa

アボリジニの言語

ンガーニャチャラ語 (西豪州中央部)	ワルピリ語 (北部準州)	アランダ語 (北部準州)	カルカトゥング語 (クィーンズランド 州西部)
apap	makili tjarntu	kngulya	thuku
punka-	wanti-	tnyi-	ngui
mayi mirrka kunangu	miyi	mirma	maa
tijna	wirliya	ingka	thapantu
rninti-	yu-	nthi-	anyi mitaa
pitja-	ya-	ihi-	ingka
parna	walya	arna	muu
kata	tjurru	kapurta	kantha mapa
nyinngi lirru	warna	apmwa	thuarr thuat
kapi	ngapa tjuwiri	kwatja	kuu

ンガリニェリ語 (南豪州)	マディ・マディ語 (ヴィク通りア州・ ニューサウスウェールズ 州境界)	グーグ・イミディル語 (ケープヨーク半島)	マブヤグ語 (トレス島嶼)
keeli wanpi	kali wirrangan	kutaa	umai
pink	puika	pulii	puwidi
yayurumi	thaka	mayi	ai
turni	thinangi	thamal	mazar
pemp	wkatha	wumaa	peiban
ngop	yirnka	thataa	uzuri
ruwi plepi	thangi	pupu	buradar
kuuli	purpu	ngaapaay	kuwik
krayi	karni	tjaarpaa	tabu
nguki maarnmani	kathini	puurraay	nguk

4. 特徴的な言語現象

アボリジニの言語に見られる特徴的な現象を列挙して記述する。以下の項目に特化して（格体系・接辞・人称代名詞・音韻面など）その概要を描く。

（１）格の体系

アボリジニの言語が一般に概して自由語順である（Word order is generally flexible.^{70））と言われるのは格標示がしっかりしているからである⁷¹。}

「私が・それを・見た」

「私が・見た・それを」

「それを・私が・見た」

格の問題に関して、アボリジニの言語で殊に知られているのは能格（ergative）の現象である。日本語などのような「主格・対格タイプ」ではなく、次の図表のような表われ方（「能格・絶対格」タイプ）をする。

	自動詞	他動詞動作主項	他動詞被動者項
日本語など	主格 (nominative)	主格 (nominative)	対格 (accusative)
オーストラリア 原住民語	絶対格 (absolutive)	能格 (ergative)	絶対格 (absolutive)

具体的にアランダ語（Aranda, オーストラリア中央部）の例で示そう。この言語で能格を示すマーカーは接尾辞の -la である。

自動詞

「子どもが起きた」

kitjiya kamirrika

子ども 起きた

(絶対格)

他動詞

「その女性が子どもを見た」

arrukutjala kitjiya rika

女性 子ども 見た

(能格) (絶対格)

この文例（自動詞文・他動詞文）のうち、他動詞の主語の位置に能格 (ergative) が現われている。片や、このアランダ語の文例において、絶対格 (absolute) はゼロ標示 (zero-suffix, マーカーなし) である。

主格・対格タイプ言語のラテン語、および、能格・絶対格タイプ言語のアランダ語を対比的に示そう。

ラテン語

自動詞

Fama volat. 「噂が飛ぶ」

噂 飛ぶ

(主格)

他動詞

Britannicus amat Juniam. 「ブリタニクスがユリアを愛する」

ブリタニクス 愛する ユリア

(主格) (対格)

アランダ語

自動詞

arrukutja angkika. 「その女性が話した」

女性 話した

(絶対格)

他動詞

arrukutjala kitjiya rika. 「その女性が子どもを見た」

女性 子ども 見た

(能格) (絶対格)

ただし、オーストラリア全土で一貫した能格・絶対格パターンが現われるわけではなく、北西部のナルルマ語 (Ngarluma) では、次のような主格・対格パターンが見出される。⁷²

自動詞

「その男性が倒れた」

mayaka pungkanha

男性 倒れた

(主格)

他動詞

「犬がその男性を噛んだ」

yukuru pilyanha mayakaku

犬 噛んだ 男性

(主格)

(対格)

また、能格・絶対格パターンでなく主格・対格パターンが現われる別のケースがある。オーストラリア原住民語の文法で目に付く現象に、通常の代名詞に加えて付属代名詞というものがある⁷³。通常の代名詞は能格・絶対格のパターンを示すのであるが、付属代名詞に限って主格・対格のパターンで現われる。ジャル語 (Djaru) の例で示す⁷⁴。

自動詞⁷⁵

「私が座った」

ngadyu nga-rna nyirra.

私が C - 私が 座った

代名詞 付属代名詞

(絶対格) (主格)

他動詞

「私があなたを見た」

ngadyu-nggu nga-rna-nggu nyundu nyanya

私が C- 私が - あなたを あなたを 見た

代名詞 付代 付代 代名詞

(能格) (主格) (対格) (絶対格)

(2) 接辞 (接頭辞・接尾辞)

オーストラリア諸言語は一般に接辞 (接頭辞・接尾辞) が豊富である。この独自性は、例えば次のように、ある 1 つの語根 (root) に複数個の接辞が付くことがよくあることからわかる。一例(ティウイ語)を示すと次の通りである。

「私はしばらく食べ続けていたものだった」

ngi - rru - unthing - apu - kani

接頭辞 接頭辞 接頭辞 語根 接尾辞

「私が」 過去 継続 「食べる」 反復

このうち、例えば反復を表わす接尾辞 (-kani) を省く文を作ると以下のようになる⁷⁸。

「私は食べていた」

ngi - rru - unthing - apa

接頭辞 接頭辞 接頭辞 語根

「私が」 過去 継続 「食べる」

名詞についても同様に、ピッタピッタ語 (Pitta-Pitta) からの例証で示すと、

「クモがアリを食べた」

kupu-lu	tita - na	tatyi	-	ka
語根 接尾辞	語根 接尾辞	語根		接尾辞
「クモ」	「アリ」	「食べる」		過去

この文例のようになる。この例で、行為者 (agent) を表わすのが接尾辞 -lu で、動詞の行為の影響を受ける (patient) ことを示すのが接尾辞 -na である。この SOV の語順が基本であるが⁷⁹、格の標示が明確であるので、例えば次例のような他の語順 (SVO) も可能である。

「クモがアリを食べた」

kupu-lu	tatyi - kat	ita	-	na
語根 接尾辞	語根 接尾辞	語根		接尾辞
「クモ」	「食べる」 過去	「アリ」		

類似の例 (ピッタピッタ語) は以下の通りである。

「その老人が笑った」

kupakupa	wiya	-	ka
	語根		接尾辞
「老人」	「笑う」		過去

「その老人はヘビを殺した」

kupakupa-lu	piti -	ka	wama - na
語根	接尾辞	語根	接尾辞
「老人」		「殺す」	過去
			「ヘビ」

「蚊がその老人を刺す」

muki-lu	patya	- ya	kupakupa - na
語根	接尾辞	語根	接尾辞
「蚊」		「囓む」	現在
			「老人」

(行為者など以外の) いわゆる斜格を表わす名詞の用法を挙げると以下のようである。

「その老人はイサ山からダーウィンへ行った」

kupakupa	karnta - ka	Mt Isa - inya	Darwin	- inu
	語根	接尾辞	語根	接尾辞
「老人」		「行く」	過去	
		「イサ山」	「から」	「ダーウィン」
				「へ」

この文例では、名詞の後に接尾辞 (-inya, -inu) を付けて、英語でいう前置詞の機能を果たしている語形の例が示されている。同じように、「～に」(英: in) だと -ina で、「～の」(英: of) だと -nga で表わされる (Darwin-ina「ダーウィンに」、kupakupa-nga「その老人の」)。このように、接尾辞によって異なる格が標示されるわけであるが、母音調和がはたらくため先行する母音に応じて語形が複数個ある。例えば、ワルピリ語で、与格(「～に」、英: to) は、-ki (i の後で) : -ku (a や u の後で) となり、奪格(「～から」、英: from) は、-ngirli (i の後で) :

-ngurlu (a や u の後で) となる。こうした接辞による格標示と並んで、前置詞による用法もある。

ティウイ語 kapi 「～へ」

「浜辺へ」

kapi tingata

～へ 浜辺

「空へ (向かって)」

kapi yungunkwa

～へ 空

名詞を修飾する形容詞については次のような規則である。すなわち、次の例（ピッタピッタ語）に見られるように、名詞の後に置かれるのが通常で、その際、名詞と同じ語尾をとる⁸²。

「大きいクモがアリを食べた」

kupu-lu	wima - lu	tita - na	tatyi	- ka
語根 接尾辞	語根 接尾辞	語根 接尾辞	語根	接尾辞
「クモ」	「大きい」	「アリ」	「食べる」	過去

ここでは、kupu-lu 「クモ」(名詞)を修飾する形容詞 wima - lu 「大きい」も名詞と「クモ」同じ接尾辞 -lu をとっている。同様に、tita - na 「アリ」に形容詞「大きい」がかかる場合は wima - na のように、名詞 tita - na 「アリ」と同じ接尾辞

-na をとる。

「クモが大きいアリを食べた」

kupu	-lu	tita	- na	wima	- na	taty	- ka
語根	接尾辞	語根	接尾辞	語根	接尾辞	語根	接尾辞
「クモ」		「アリ」	「大きい」			「食べる」	過去

文法性に関して、例えば ティウィ語は2つの区別（男性・女性）があり、また複数形もあり、これらは接尾辞によって表示される。

tini 「男性」: tinga 「女性」

tiwi 「人々」（複数形）

mantani 「男の友達」: mantanga 「女の友達」

mantawi 「友達たち」

自然の性別のない名詞については、一般に物理的に小さなものは男性に、大きいものは女性に区分される傾向がある⁸⁴。

mungkwani 「小さな斧」: mungkwanga 「大きな斧」

ただし、ここで挙げたティウィ語の場合のように、文法性が男性・女性の2つに区別される⁸⁵というのはアボリジニ諸言語に関して一般化できる特性ではない。この男性・女性という区分と同格で、野菜 (vegetable)、樹木 (arboreal/

wooden)、土・地 (terrestrial) というカテゴリーが併存するケースが多く見られる⁸⁶。例えば、ブララ語 (Burarra)・ヌングブユ語 (Nunggubuyu) について記すと次のようになる。

接頭辞のあらわれによる文法性の区分⁸⁷

	ブララ語	ヌングブユ語
男性	an-	na-
女性	tjun-	ngarra-
野菜	mun-	ana-
樹木	mun-	mana-
土・地	kun-	mana-

(3) 人称代名詞

まずは典型的な例を見ることから始めよう。接尾辞言語の代表としてピチャンチャチャラ語の文例を挙げる。

「私はあなたをたたくでしょう」

pu	-	ngku	-	rna	-	nta
たたく		~だろう		私は		あなたを
		(未来時制)				

接尾辞 -ngku は、文の時制が未来であることを示しており、例えば過去の接尾辞 -ngu を用いた文例 (pu - ngu - rna - nta) では「私はあなたをたたいた」という過去時制が表現されている。ここで、主語代名詞 (rna 「私が」) や目的語代名詞 (nta 「あなたを」) は、この時制の接尾辞の後に付加され、「～が」・「～を」が表わされ文が成立することになる。ただし、ピチャンチャチャラ語を例

にとってみても、文脈に応じた表現のヴァリエーションがあるのは事実である。

「あなたは私をたたいた」

pu	-	ngu	-	rni	-	n
たたく	～た			私を		あなたが
		接尾辞		接尾辞		接尾辞
		(過去時制)		目的格 me		主格 you

(接辞でなく) 独立した語形の代名詞を添えて同じ文意を表わすこともできるわけである。

「あなたは私をたたいた」

nyuntulu		ngayunya		pu		- ngu
あなたが		私を		たたく		～た
代名詞		代名詞		接尾辞		
主格 you		目的格 me		(過去時制)		

「あなたは私をたたいた」

nyuntulu	-	rni		pu	-	ngu
あなたが		私を		たたく		～た
代名詞		接尾辞		接尾辞		
主格 you		目的格 me		(過去時制)		

以下に、一般的な特性として挙げられる諸例を概観する。代名詞に関連して接辞(接頭辞・接尾辞など)がさまざまな文法機能を担うのである。例えば数

の表わし方として、単数・複数の他に双数の体系があり、「私たち二人（ペア）」あるいは「彼ら二人（ペア）」などの表現が可能である。

アランダ語：2 人称単数	unta	「あなた（一人）」
双数	mpula	「あなた（ペアで二人）」
複数	rrangkarra	「あなたたち（複数人）」

人称に関しても独自のシステムがある。同じ1 人称でも、対話の相手を含む表現か否かを区別するのである。具体的には、

ワルピリ語：1 人称複数「私と（対話相手の）あなた」（合計二人）

ngalipa

1 人称複数「私たち二人」（ただし対話相手は含めない）

nganimpa

のように異なる語形となる。いわば **内包的 (inclusive)** あるいは **排他的 (exclusive)** というような対照的な観点から区別がなされ、話し相手が事象に関わっているのかいないのかが表現面ではっきりと弁別されるのである。

文法性について、通りわけ3 人称に注目して特徴的な事例を挙げれば、

ヌングブユ語：nika 「彼」, ngika 「彼女」

のように、男性・女性が区別して表わされる言語はむしろ稀で、多くの言語の場合、「彼」・「彼女」を表現するのに1 つの語しか表現形式がない。この事象と別のケースであるが、グーグ・イニディル語 (Guugu-Yunidhirr) の場合には、

有生性・無生性が明確に弁別される。

グーグ・イニディル語：nyulu pini

he/she 死んだ

「それ（犬〈有生物〉が死んだ）」

katapathi

折れた

「それ（例えば槍〈無生物〉が折れた）」

このように有生のものを指示する時は代名詞が現われるが、一方、無生のもの
の場合は代名詞そのものが現われない。

（４）音体系

アボリジニ言語の基本的な母音体系は、a-i-uである。これに加えて、長
母音：短母音（ii:iなど）の対立、あるいは、二重母音（ai, au）が見られる
ことがしばしばある。いくつかの言語について、母音の体系を概観してみよう。

	短母音	長母音
ティウイ語	i a o u	
ガラワ語	i a u	
アリヤワラ語	i a u	ii uu
ウイク・ムンカン語	i e a o u	ii ee aa oo uu
ジルバル語	i a u	

上に挙げた言語について同様に、子音の体系を概観してみると以下のようであ
る。

ティウイ語

p	th	t	rt	k
m	nh	n	rn	ng
l	rl			
rr	r			
w	y			

ガラワ語

p	t	rt	tj	k
m	n	rn	ny	ng
l	rl	ly		
rr	r			
w	y			

アリャワラ語

p	th	t	rt	tj	k
m	nh	n	rn	ny	ng
lh	l	rl	ly		
rr	r				
w	y				

ウィク・ムンカン語

p	th	t	tj	k
m	nh	n	ny	ng
l				

rr r

w y

ジルバル語

p t tj k

m n ny ng

l

rr r

w y

音節の構造は一般に子音で始まり母音で終わる ($C_1V_1C_2V_2C_3V_3$ など)。確かに母音で始まる例 (例えばアランダ語) もあるが、語頭の子音が消失したものとして説明できるであろう。

アランダ語: angka 「話」 < wangka

母音調和 (1 語内で同種の母音が現われる現象) を示す言語もいくつかある (例: ワルピリ語)。

ワルピリ語 maliki 「犬」: 「犬に」という意味で接尾辞をとる場合、i という母音の後では -ki となるが、その他の場合 (i という母音以外の時) -ku となる。例 kurdu 「子ども」: kurduku 「子どもに」

註

- 1 エヴァンズ Evans (2013:22)
- 2 ネットル&ロメイン (2001:i)
- 3 ネットル&ロメイン (2001: i-ii) :「最大の生物・言語多様性が見出されるのは先住民族の居住する地域で、人口こそ世界総人口の四パーセントほどにすぎないが、そこでは世界の諸言語の少なくとも六〇パーセントが話されている」。
- 4 少数民族の言語を研究する人たちは、例えば「アイルランド語は英語に殺された」という言い方をする。
- 5 英語による記述のおかげで再生を図ることができた言語が少なくない。
- 6 キーティング首相の次のような発言もある：「連邦政府がアボリジニの要求を法的でありモラルの要望として対処する」。
- 7 オーストラリアの一般の国民の目線では、アボリジニの先住権を認め、アボリジニが管理・運営する土地権とは、実際には主有権に匹敵するものと映る（青山 2001:181-182）。
- 8 梶 (1993:111-112)。キリスト教のミショナリーたちは、神の教えを理解させ、そして広めるために教育が必要だと考えていた（梶 1993:114）。
- 9 アボリジニの中でもいろいろな立場がある。例えばムンバの人たちは今もコミュニティでの生活を拒否して洞窟や岩場で生活しているアボリジニであるが、コミュニティ暮らしをしているアボリジニにやっかみを感じているふしがある。（保苅 2004:61）
- 10 フィールド言語学（本書の第3章）が少数言語を記述する当面の目標は、① 文法：ヨーロッパ的モデルを持ち込むことなく個々の言語の文法をそれ自身の観点から記述、② テキスト集：テキスト研究を通して帰納的に個別言語の内的構造を発見する、③ 辞書：できるだけ包括的な辞書を整える、という3点である（Franz Boas〈ドイツ生まれ。アメリカへ移住〉の提唱したモデル）。
- 11 エヴァンズ Evans (2013:38)
- 12 現在の人類学の知見では、700 万年ほど前に猿人が出現した後、50 万年前にアフリカで旧人、同じくアフリカで 20 万年前にホモ・サピエンス（新人）が出現、8~6 万年前にこの新人がアフリカを出て世界各地に広がっていったとされている。
- 13 オーストロネシア語族はオセアニアにおいては新しい民族である。ただ、その広がり、インドネシア・フィリピン・マレー半島を中央に、北は台湾、西は

- マダガスカル島、東はポリネシアのイースター島にまで及ぶ。
- 14 ただし、言語の面で系統的な関係を見出すのは困難である：“Austronesian and Australian languages are quite different in type and there is no hint of common ancestry.” (Yallop 1982:31)
- 15 オーストラリア先住民と同じ遺伝子をもつ人々がアジアに散見されるという報告もある。
- 16 言語の歴史において万年の単位の年代が経過すると、言語相互間の系統関係の解明は伝統的な比較言語学的手法では極めて困難か不可能である（崎山 1993:69）。
- 17 基本的にあくまで比較言語学的手法をとろうとする Dixon（1980）の提唱は正論ではあるが限界があることも確かであろう。
- 18 5 万年の間、基本的に狩猟採集という形態は変わらなかったことになる。オーストラリアは、農耕の技術・武具（弓矢）・土器のない唯一の大陸である（大林 1999:23）。5 万年前から歴史時代に至るまで狩猟採集生活が継続したという点で、例えば近隣のニューギニアとは異なっている（印東 1993:102）。
- 19 舟・筏による（東南アジアとは数十キロの距離）。
- 20 オセアニアは、太平洋（Ocean）を中心に、その島々ならびにオーストラリア大陸を指すが、もともとはギリシア語の *ōkeania*「地球の周りを取り囲む大河」に由来する（崎山 1999:29）。オセアニアは人類史の中でアメリカ大陸と並んで新しい。考古学の立場から言えば、後期旧石器時代になってはじめて人類が住むようになった地域である。
- 21 崎山（1993:69）。
- 22 （ニュージーランドを除く）東ポリネシア（西ポリネシア＝サモア・トンガ）の主な島々への移住は紀元 850 年頃までには終わっていたであろうことは考古学的に証明されている。ニュージーランドへの移住は紀元 1000 年頃であったと考えられている。ポリネシア人の伝承では「自分たちの祖先はハワイキと呼ばれる西の方から朝日に向かって帆を上げてやってきた。そして人が死ぬと、その魂は日の沈む西方へ戻っていく」と伝えられている。東ポリネシアという西方とはサモア・トンガを指している。
- 23 これまで「マライ・ポリネシア語族」ともよく呼ばれてきた。
- 24 家畜・栽培植物を携えての渡海移動であったからこそ、動物・植物資源に乏しいオセアニア島嶼部に住み着くことが可能であったのだと言われている。

- 25 ベルウッド Bellwood (2008:iii) : 「ポリネシア人が広範囲に分布するという事実は実際にはオーストロネシア語族の拡散」。
- 26 1952年ニューカレドニアで発見された土器が「ラピタ土器」と命名されたことから、この文化がラピタ文化と呼ばれるようになった。ポリネシア文化の源流とする考え方が有力である。
- 27 ラピタ人は、人類史上初めて遠洋航海を実践し太平洋の島々に住み着いたと考えられる民族で、言語的には、オーストロネシア語族（日本語：「南島語族」）の元となったオセアニア祖語（Proto-Oceanic）に近いであろうと想定されている。祖先は（オーストロネシア語を話す）モンゴロイド系の民族であり、元々は台湾にいて、その一部が紀元前 2500 年頃に南下を開始した。フィリピンを経て紀元前 2000 年頃にインドネシアのスラウェシ島・ニューギニア島・メラネシアに到達し、ここでオーストラロイドのパプア先住民と混血し、ラピタ人の始祖となった（紀元前 1100 年頃までに、西ポリネシアのサモア・トンガ海域に到達していた）。現在、タヒチ人やハワイ人、ニュージーランドのマオリ族、イースター島でモアイ像を作ったとされる人々と共に太平洋全域へと広まった言語・習慣・文化はラピタ人から受け継がれたものである。



イースター島の象徴モアイ像。ラピタ人が祖先の姿を描いて作り始めたと言われている（www.tour.ne.jp）。

- 28 オーストロネシア語族についても、過去の言語の再構形に依拠しながら、考古学的に先史文化を再編成し、故地や民族移動を推定しようとする試みが盛んに行われている。
- 29 崎山（1993:67）・大林（1999:21）
- 30 オーストロネシア語族（基本的にモンゴロイド系）が渡来するはるか以前の数万年前に移住していたオーストラロイド（オーストラロ・メラネシアン）とされる先住民との間で、言語的・文化的に激しい混交が行われた。その痕跡は特にメラネシアにおける言語の構造的多様性のなっている（崎山 1993:67）。
- 31 農耕文化圏が拡大することになった。
- 32 原ポリネシア語は、今から 3000 年前ころ、フィジーからトンガを經由してサモアに至ったオーストロネシア語族の一派によって形成された。彼らは、メラネシア人・パプア人となった民族より約 1000 年遅れて、すでに先住民のいたメラネシアを通過し、無人島であったポリネシアに達したのである（崎山 1993:69）。14・15 世紀には遠洋航海を終えポリネシアの各島々は孤立化しそれぞれ特徴的な文化を築いていた（ヨーロッパ人が渡来するのは 16・17 世紀のことである）。
- 33 メラネシア語派は多くの点でポリネシア語派と言語的特徴を異にしている。インドネシア語がパプア諸語と接触し混合して（ピジン化を受けて）メラネシア語派が形成されたとする説が有力である。なお、仮面舞踏・秘密結社がメラネシア文化の特徴である。
- 34 大林（1999:21）
- 35 https://blogs.yahoo.co.jp/alternative_politik/22920207.html
- 36 青山（2001:97）：「アボリジニ文化のように歌や踊りや神話として伝承され、文字ではなく語りとして受け継がれ、目に見えない精神性を重んじてきた文化を、西洋の実証主義によって判断し証明することには根本的に無理がある。そのようなシステムでは、アボリジニ自身の文化の分析方法や裁判所で口頭証言を評価する価値基準は、白人の裁判官からは信頼するに足らないとして却下されてしまうこともある」。
- 37 青山（2001:119-120）：「ドリーミングに基づいて大地の精霊に踊りと歌を捧げることを知識として習得しても、精霊の存在を信じていなければその踊りと歌はまったく意味をなさない。ドリーミングはアボリジニのただの夢物語に過ぎ

なくなる。精霊の形は目には見えない。目に見えないものは証明できない。[…]
しかし、観察できないからといって、また手に触れることができないからといって、存在していないとは限らない。[…]
岩や木や草花に宿る精霊は存在するのだろうか。アボリジニにとって、答えはイエスである。それは、証明されるべきものではなく感じるものだからである」。

- 38 ドリーミングについての解説は、ローズ（2003:65-70）に詳しい。アボリジニの世界観とは次のようなものである（ローズ 2003:59-60）：「この世に生じたものは、すべからくその創造を前提としている。多くのアボリジニにとって、この世のあらゆるものは生きている。動物、樹木、雨、太陽、月、特別な岩や丘、そして人間、これらすべては意識をもつ。レインボウ・スネークや毛濃いバケモノたち（Hairy People）、スングリ男（Stumpy Men）などの生きものもいる。これらすべてが、存在する権利をもち、それぞれ自分が帰属する場をもち、自分の法と文化をもっている」。

- 39 保莉（2004:62-3）

- 40 ローズ（2003:29）のことはを借りれば、「大地は生命を維持するための『巨大なバッテリー』である。このバッテリーは、アボリジニの人々が儀式を執り行うことで、生命力を充電することができる」。ドリーミングについての解説は、ローズ（2003:65-70）に詳しい。アボリジニの世界観とは次のようなものである（ローズ 2003:59-60）：「この世に生じたものは、すべからくその創造を前提としている。多くのアボリジニにとって、この世のあらゆるものは生きている。動物、樹木、雨、太陽、月、特別な岩や丘、そして人間、これらすべては意識をもつ。レインボウ・スネークや毛濃いバケモノたち（Hairy People）、スングリ男（Stumpy Men）などの生きものもいる。これらすべてが、存在する権利をもち、それぞれ自分が帰属する場をもち、自分の法と文化をもっている」。

- 41 保莉（2004:64）

- 42 さまざまな情報がアボリジニ社会のネットワークを通して（オーストラリア北部の牧場地帯では牧閑期である雨期にはアボリジニの労働者は牧場を離れカントリーを巡る（walkabout）。こうして他の牧場などに暮らす周辺の人々と密接にコンタクトをとる機会がある）オーストラリア大陸じゅうに拡まっていたというのも現実味のある話である（保莉 2004:170）。

- 43 青山（2008:28-31）。さらに「アボリジニには、土地を所有するなどという発想はなく、土地を切り刻んで所有したり売買するという発想は持ち得ない。それ

- それぞれの部族には、先祖伝来の居場所があり、各部族が受け継いだ決められた土地には先祖伝来の話（ヒス通り）がある」（ibid.）。
- 44 白人の多くが、混血児は白人の中で育てられた方が本人の幸福につながると信じていた（青山 2001:195）。
- 45 この発想自体はヨーロッパから入ったものであるにせよである。
- 46 保莉（2004:168）
- 47 青山（2008:28-31）
- 48 結婚は自分のクラン外の人としなければならないので、自分の妻ないし夫が自分と異なる言語を話すのは普通である（エヴァンズ Evans 2013:23）。
- 49 差異を目指すイデオロギーが、クランなどの言語集団の間の多様性を生み出す力となっている（エヴァンズ Evans 2013:43）。
- 50 次の図式は Yallop（1982:34）に基づく。用語としては上から順に、Family（語族）、Group（語群）、Subgroup（語派）、Language（言語）、Dialect（方言）となっている。
- 51 例えばオーストロネシア語族の全般を見渡すと、オセアニアにはメラネシア語派（語群）とポリネシア語派（語群）があるということになる。通りわけ、前者（メラネシア）には、異なる文化をもつ人々が何回かにわたって（しかも時間的にかなりの隔たりをもって）やってきたという回廊としての役割がある（印東 1993:101）。
- 52 Wurm（1972, 1982）
- 53 こうしたアプローチを通時的に拡張し、ある言語が元の言語から分出した経過年代を語彙に基づいて測定する方法が言語年代学（glottochronology）である。一般的に、1,000 年たつと基礎語彙の 20% 弱が失われるという。
- 54 Blake（1987:110）
- 55 エヴァンズ Evans（2013:39）
- 56 いわゆる総称である「アボリジニ」という術語は、そもそも主流文化となった白人オーストラリア人意識による歴史的構築物であるとされる（Attwood 1989）。いわば劣等人種としての「アボリジニ」という概念が構築されたのである。
- 57 Yallop（1982）は、著書の序で、“The reader is asked to assume that Aboriginal languages are indeed systematic.”（Yallop 1982:19）と述べ、アボリジニの言語に関する偏見を解いている。

- 58 植民は大陸東南部・タスマニア島から始まり、今日この地域では原住民はほとんど皆無である。現在では約 15 万人のアボリジニの人口が推定されるが、混血で原住民は約 5 万人と言われている（角田 1988:992）。
- 59 数値に正確な情報を求めるには無理がある。当時のデータが不足しているからである（Yallop 1982:27）。
- 60 狩猟・採集民族（ベルウッド Bellwood 2008:x）
- 61 本来は「人」という意味である。
- 62 ただし、諸語群・語派が集中している地域がアーネムランド・キンバリーを中心とする大陸北西部であり、オーストラリア諸語の故地ではないかと想定される。比較言語学的方法による系統分類は全く進んでいない。
- 63 接尾辞も併せて用いる。つまり、接頭辞言語は接頭辞も接尾辞も使うが、一方、接尾辞言語は基本的に接尾辞のみを用いる。
- 64 もっとも、非パマ・ニュンガン系であり、かつ接尾辞言語というグループもある（Djingili 語派, Garawan 語派, Minkinan 語派）。
- 65 「接頭辞」型の言語は、辞順（主語代名詞接辞 s, 目的語代名詞接辞 o, 動詞語根 V の配列）が soV あるいは osV となり、一方、「接尾辞」型の言語では Vso あるいは Vos となるのが特色である。また、語順は一般にオーストラリア諸語では SOV をとる。
- 66 角田（1988:992）。
- 67 Blake (1994:266-267), Dixon (1980:220-228), 角田 (2003:237). Blust (2013:761) が語る部分を引用すれば, “Dixon (1980) discussed various features of ‘Proto Australian’ phonology, but without any clear use of the comparative method or subgrouping. Some Australianists therefore question whether a Proto Australian sound system has yet been reconstructed.”
- 68 この語群も「接尾辞言語」である。
- 69 この言語の音声を聴くには、http://ezra.com/mp3/ken_hale_warlpiri/ というサイトがある。
- 70 Yallop (1982:121)
- 71 ただし、文脈など語用論的要因に大きく左右される。
- 72 mayaka が主格で「男性が」の意で、対格の語尾の -ku が付いた mayaka-ku が「男性を」（対格）を表わす。
- 73 フランス語のようにである。

- 74 角田 (1999:45-46)
- 75 ここで、C は carrier の略で付属代名詞を運ぶ機能だけをもった品詞である（語形は nga）。
- 76 「付代」とは付属代名詞のことである。
- 77 -nggu は能格に語尾を示している。一方、絶対格はゼロ語尾である。
- 78 現在形「私は食べる」は、ngu「私が」-apa「食べる」となる。0
- 79 Blake (1987:16)
- 80 この文例は自動詞構文であるため、接尾辞 -lu は付いていない。
- 81 接尾辞 -ka (過去時制) に対して、この -wa 接尾辞は現在時制を表わす。
- 82 この文法ルールはピッタピッタ語に当てはまるものである。
- 83 言語の名前（ティウイ語 Tiwi）は、この「人々」という語形に由来する。
- 84 Yallop (1982:102)
- 85 この文法性の区分はフランス語・イタリア語と同じである。
- 86 かと云って、このような文法性の区分によって、アボリジニ言語を母語とする人々の世界観を洞察できるというには至らないであろう。
- 87 接頭辞・接尾辞に関わらず「野菜」の場合、m- となることがアボリジニ言語全般に共通している。こうした接辞はもともと独立した名詞に由来するのかもしれない（Yallop 1982:105）。
- 88 アラビア語と同じ母音体系である。

参考文献

- 青山晴美 (2001) 『もっと知りたいアボリジニ アボリジニ学への招待』 明石書店
- 青山晴美 (2008) 『アボリジニで読むオーストラリア』 明石書店
- Attwood, B. (1989) *The Making of the Aborigines*. Sydney ; Allen & Unwin.
- Bellwood, P. (2005) *First Farmers : The Origins of Agricultural Societies*. Malden (MA) : Blackwell. 『農耕起源の人類史』（長田・佐藤 訳）京都大学学術出版会 2008.
- Blake, B. J. (1987) *Australian Aboriginal Grammar*. London & Sydney : Croom Helm.
- Blake, B. J. (1994) *Australian languages*. R.E.Asher (ed.) *The Encyclopedia of Language and Linguistics*. Vol. 1, p.266-273. Oxford : Pergamon Press.
- Blust, R. (2013) *The Austronesian languages*. Australian National University. 9781922185075 (ebook)

- Dixon, R. M. W. (1980) *The languages of Australia*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Evans, N. (2010) *Dying Words. Endangered Languages and What they have to tell us*. Wiley-Blackwell.『危機言語 言語の消滅でわれわれは何を失うのか』(大西・長田・森 訳) 京都大学学術出版会 2013.
- Fishman, J. A. (1982) "Whorfianism of the third kind: ethnolinguistic diversity as a worldwide societal asset." *Language in Society* 11:1-14.
- 保苅 実 (2004)『ラディカル・オーラル・ヒストリー オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践——』御茶の水書房
- 梶 茂樹 (1993)『アフリカをフィールドワークする』大修館書店
- 印東道子 (1993)「メラネシア——文化の回廊地帯」『オセアニア①島嶼に生きる』(大塚 柳太郎 他 編)、東京大学出版会、p. 101-114.
- Nettle, D. & Romaine, S. (2000) *Vanishing Voices: The Extinction of the World's Languages*. Oxford : Oxford University Press.『消えゆく言語たち:失われることば, 失われる世界』(島村宣男 訳) 新曜社 2001.
- 大林太良 (1999)「オセアニア文化への招待」月刊『言語』(28-7) 1999 年 7 月号、p. 20-28.
- Price, G. (1984) *The Languages of Britain*. London : Edward Arnold.
- Rasmussen, M. (2011) "An Aboriginal Australian Genome reveals separate human Dispersals into Asia." *Science* 334:94-98.
- Reynolds, H. (1989) *Dispossession : Black Australians and white invaders*. Sydney : Allen & Unwin.
- Rose, D. B. (1996) *Nourishing Terrains : Australian Aboriginal Views of Landscape and Wilderness*. Canberra : Australian Heritage Commission.『生命の大地——アボリジニ文化とエコロジー』(保苅 実 訳) 平凡社 2003.
- 崎山 理 (1993)「オセアニアの言語的世界」『オセアニア①島嶼に生きる』(大塚柳太郎 他 編)、東京大学出版会、p. 65-83.
- 崎山 理 (1999)「オセアニアの言語の系統とその特徴」月刊『言語』(28-7) 1999 年 7 月号、p. 29-37.
- 角田太作 (1999)「オーストラリア原住民語」『言語学大辞典』(亀井孝・河野六郎・千野 栄一 編著) 第 1 巻、三省堂、p. 992-1031.
- 角田太作 (1999)「オーストラリア原住民語の世界」月刊『言語』(28-7) 1999 年 7 月号、p. 42-49.

角田太作 (2003) 「原住民の言語・文化の維持と復活 オーストラリア」 大角 翠 編『少数言語をめぐる 10 の旅 フィールドワークの最前線から』、三省堂、p. 237-266.

Yallop, C. (1982) *Australian Aboriginal languages*. London : Andre Deutsch.

Wurm, S. A. (1972) *Papuan Languages of Oceania*. Tübingen : Gunter Narr.

Wurm, S. A. (1982) *Languages of Australia and Tasmania*. The Hague & Paris : Mouton.